はははは：
おっ母様にも父様にも親こう行できずじまいやったな
そんなことないよ
兄さんは幕府の儒官にまで出世したようやったよ
おいおい
変ないい方するな
それじゃ まるでつ私がつ
ゴッホッ
——もう死んでしまうみたいに聞こえるじゃないか
柴野邦彦の答えがまだ出てないよ
もう出とるよ
兄さんや兄さんの生き様そのものがその答えだよ
どんな学問をするにもどんな夢をかなえるにも
一歩一歩あるかなきゃいかんってことだよ 近道も裏道もない
その時は
とてもムダでむなしい作業だと感じるなげ出してしまいたくなるでもその一歩一歩が
大切なんや一歩一歩を怠って 後で悔んだって とり返しはつかん

皆 わかってても
それを実行できる人
はそうはおらん
つまづいても 転んでも
また たちあがって
歩きつづける
小輔は私を
かいかぶりすぎとる
ねえ 久保さん
ふふふ
兄さん
えらかったよ 強かったよ
よう歩いたよ
兄さん 僕等
の分まで歩いて
くれた
先生！
芝山先生！
この傷のおかげで
彦輔は学問をつづけて
来れたのです
兄さんのつぎの一歩
は きっと後の世の
若者達が歩きついで
くれるよ

お国への
ご恩返しがまだ
途中だのに…

なあ小輔

今から讃岐へ帰ろうか
年礼に帰ってふたりで
五剣山に登ろう

ええね

なっ
ええ思いつきやろっ
小輔――

親友の浜園さんも逝った同じ年、文化四（一八〇七）年十二月一日江戸の私宅で兄は息をひきとった。

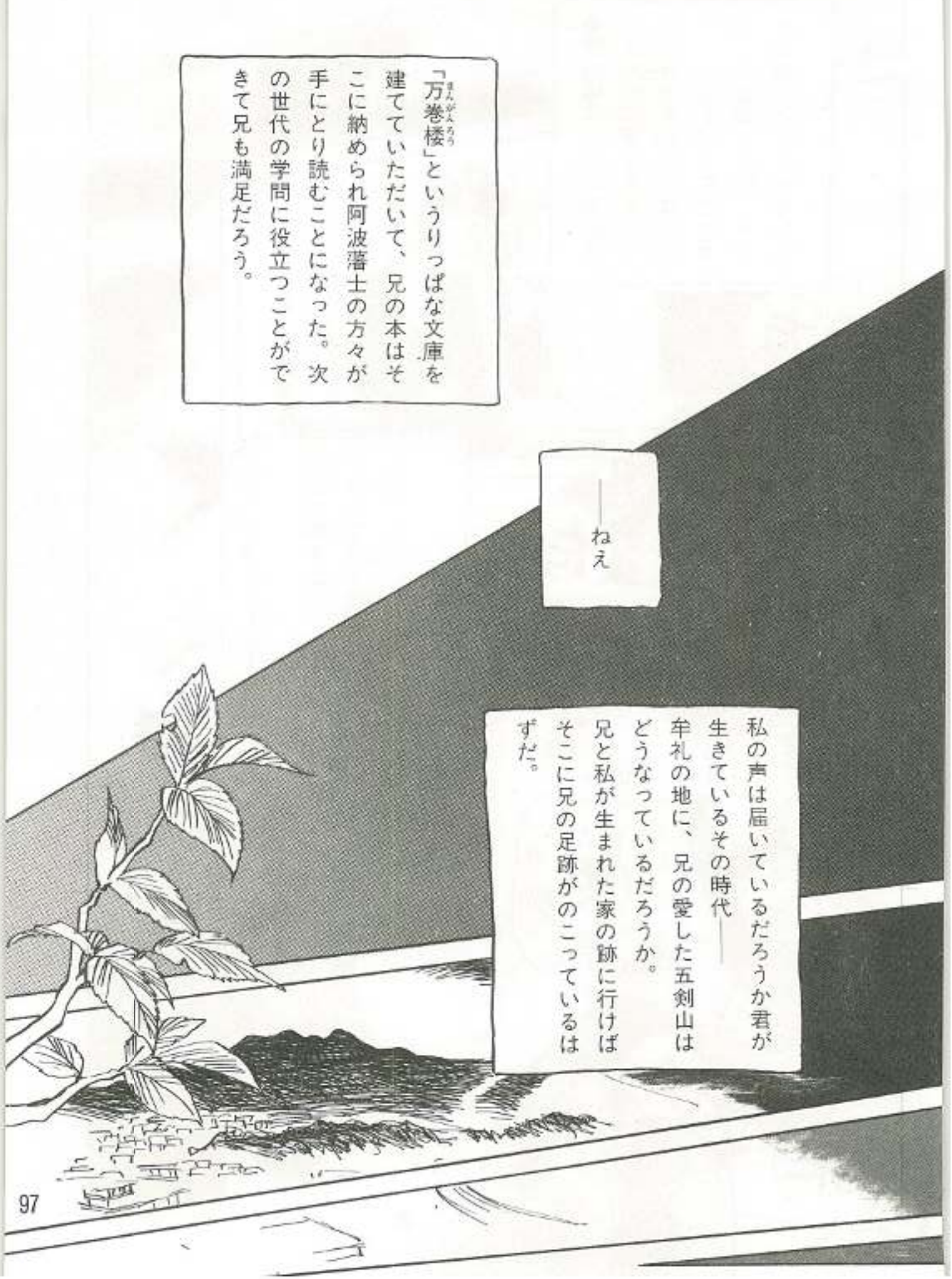
…なんという
ことだ!!
この行蔵が

バカなおごりを捨てて
もっとはやく先生
に会っておれば…

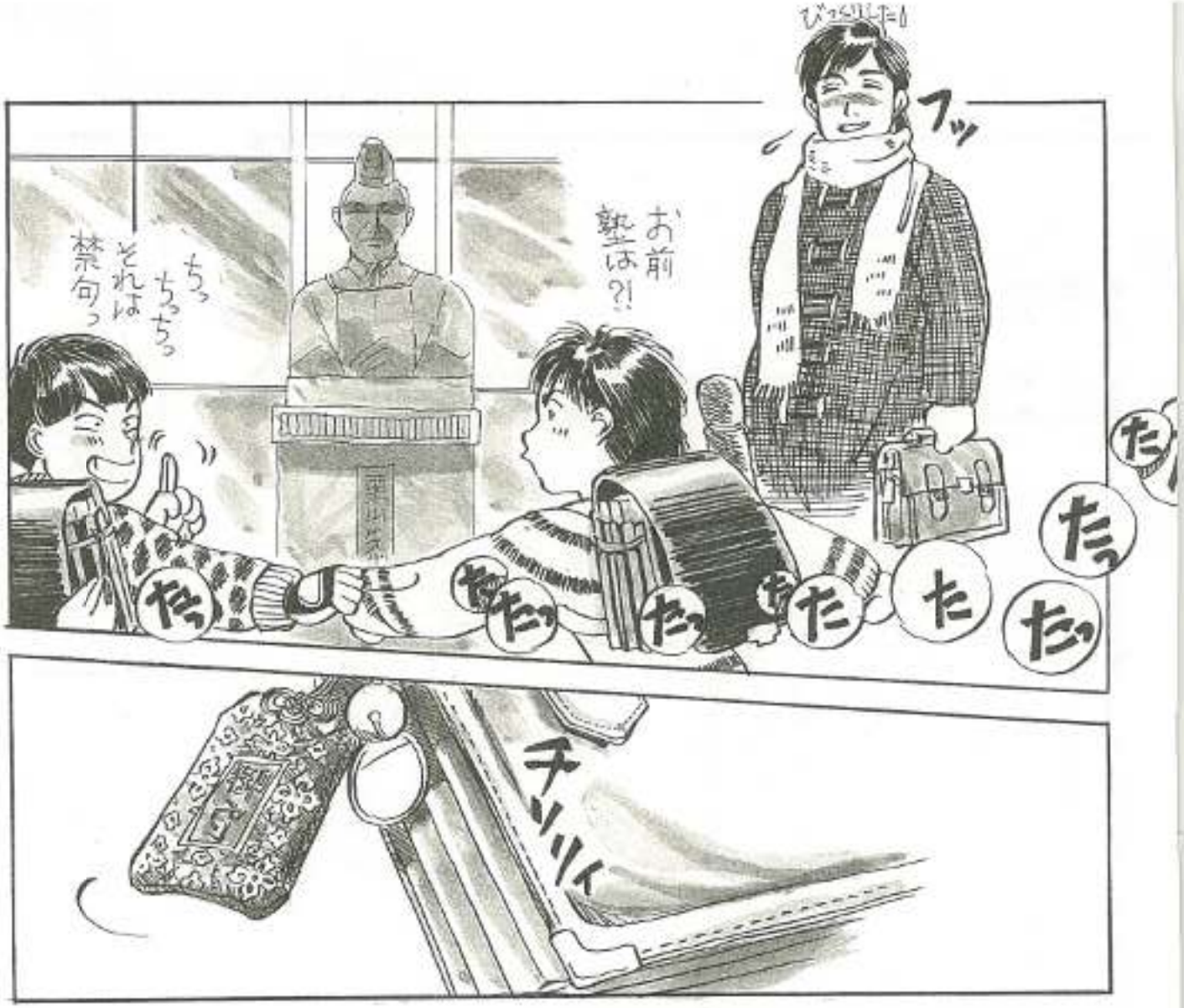
日本の明日を…ともに
語り合うことも
できたものを!

約束された
ではないか!共に
蝦夷の地へと

栗山先生
春はすぐそこでは…ないか
七十二年の道のりを終える前に兄が自分の墓誌を自分の手で残したのはいずれそれを書くことになる人のつらさを想いやったからだろうか……
兄が大切に読み集めた九千冊あまりの本は兄の遺言どおり阿波のお殿様に送られた。幼い頃、兄が学問をお教えした治昭様へ。


「万巻楼」というりっぱな文庫を建てていただいて、兄の本はそこに納められ阿波藩士の方々が手にとり読むことになった。次の世代の学問に役立つことができて兄も満足だろう。
——ねえ
私の声は届いているだろうか君が生きているその時代——
牟礼の地に、兄の愛した五剣山はどうなっているだろうか。
兄と私が生まれた家の跡に行けばそこに兄の足跡がのこっているはずだ。

受験の頃になるとお守りのかわりに葉をもがれていた柊の木があるはずだ。
——ふと思うのだけれど、兄の歩く姿は、その柊の葉にどこか似ている。
先生たのむよー
たっ
たったった
え!?
たっ
鋭敏で潔ぎよくいつもすがすがしかった。
たったっ
たっ
た
たっ
たっ
たっ
た
たたた



つぎの一歩は、きみの一歩。

END